2000年（平成12年）7月10日発行　第243号　（昭和５９年１０月１日第三種郵便物認可）

教皇様の聲 7 243号

Libreria Editrice Vaticana,Citta del Vaticanoの転載許可済 2000

ご受難と三位一体の栄光

1 キリストの死を知らせる福音の終わりに、古代ローマ百人隊隊長の声が鳴り響き、教会の信仰告白が先取りされました。「本当に、この人は神の子だった。」（マルコ15・39）イエスの地上での生活の最後の数時間、三位一体の最高の明示が暗闇の中で起こりました。キリストの受難と死についての福音の記述は、天国の父との親密な関係が、苦しみの深淵においてさえ続くということを記録しています。

全ては壁に囲まれた静かな高間での出来事でしたが、最後の晩餐の夜に始まりました。すでにそこでは、裏切りの影がぼんやりと現われています。ヨハネはこれらの別れの話を私たちのために表現しました。それは見事に、イエスと御父との深い絆と相互内在を強調しています。「あなたがたが私を知っているなら、私の父をも知ることになる。... わたしを見た者は、父を見たのだ。... わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行なっておられるのである。わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。」（ヨハネ14・7、9～11）

こう言って、イエスは少し前に簡潔に宣言した言葉を繰り返しておられます。「わたしと父とは一つである。... 父がわたしの内におられ、私が父の内におられる」（ヨハネ10・30、38）また、高間での話を結ぶにあたり、御父の栄光を眺めながら、次のように言われます。「聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください。わたしたちのように、彼らも一つとなるためです。」（17・11）このように御父に完全な信頼を示すイエスは、究極の愛の行為を果たす準備をなさいます。（13・1参照）

受難は神と救い主の栄光を現わす

2　御父と御子を一つにする絆は、受難において、特に熱烈に、同時に劇的な方法で明らかにされます。神の御子は、何から何まで人間として生活し、人間の条件である苦しみと死の闇に入り込まれました。ゲッセマニにおいて、苦闘、「激しい苦しみ」にも似た祈りの中で、イエスはアラマイ語で子としての親しさを込めて御父にお話しかけになります。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行なわれますように。」（マルコ14・36）

すぐ後で、人間の敵意がイエスに向かって解き放たれた時、イエスは、この暗闇の時間は御父の神聖なご計画の一つであることをペトロに思い出させます。「わたしが父にお願いできないとでも思うのか。お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださるだろう。しかしそれでは、必ずこうなると書かれてある聖書の言葉がどうして実現されよう。」（マタイ26・53～54）

3　裁判での大祭司との問答もまた、神の御子を取り囲む救い主と神の栄光の啓示へと変わります。「大祭司は言った。『生ける神に誓って我々に答えよ。お前は神の子、メシアなのか。』イエスは言われた。『それは、あなたが言ったことです。しかし、私は言っておく。あなたたちはやがて、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に乗って来るのを見る。』」（マタイ26・63～64）

イエスが十字架上におられる時、そこに居合わせた人々はイエスが言われた言葉を皮肉を込めて思い出させます。「神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ。』と言っていたのだから。」（マタイ27・43）しかしその時御父は沈黙なさいましたが、それはイエスが罪人と一つになって、罪人を救うためでした。「カトリック教会のカテキズム」は次のように教えています。「イエスは、あたかも自分が罪を犯したかのように、罪を経験したのではない。（ヨハネ8・46参照）しかし、常に御父と一致に向かう愛、贖いを望む愛によって、主は人間と同じものになられた。」（603番）

4　十字架上において、イエスは実際に御父との親し

い語り合いを続けます。傷つき引き裂かれた人間性に引きずられながらも、御父と「一つ」である御子として、信頼を持ち続けたのです。一方で、御父の神秘的な沈黙がありますが、それは、宇宙的暗闇に包まれ、叫びによって貫かれます。「『エリ、エリ、レマ、サバクタニ。』これは、『わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。』という意味である。」（マタイ27・46）

他方、イエスがここで引用する詩篇22は、世界と歴史の王である主への賛歌で終わります。この様子はルカの記述で強調されています。その記述にある死に際のキリストの最後の言葉は詩篇をはっきり引用しています。また、そこに御父への祈りが加えられます。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」（ルカ23・46、詩篇31・6参照）

三位一体は苦しみと闇の時にも現われる

5　聖霊は御父と御子の絶え間ない対話にも参与します。私たちはヘブライ人の手紙によってこのことを教えられますが、いくぶん三位一体の決まり文句となっている言葉で、その手紙はキリストの犠牲的な奉献を記し、次のように述べています。「永遠の霊によって、御自身をきずのないものとして神にお献げになった」（ヘブライ9・14）受難において、苦悩するキリストはすべてを聖霊にお委ねになりました。キリストの死が完全に御父への奉献となるよう聖霊は必要な力を与えました。

第四福音書は、聖霊の賜物イエスの「出発」、つまり受難と死を結びつけています。その時のことを、福音書はこう記しています。「しかし、実を言うと、わたしが去って行くのはあなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところに送る。」（ヨハネ16・7）イエスの十字架上の死の後、突き刺された脇腹から流れ出る水は（ヨハネ19・34参照）、聖霊が与えてくれるものを象徴していると考えることができます。（ヨハネ7・37～39参照）そのとき、御父は御子に栄光を与え、全ての人々が聖霊と交わることができる力を御子にお授けになりました。

十字架の聖テレジア・ベネディクタ（エディット・シュタイン）の霊的「遺言」の言葉を読み返しながら、受難と暗闇の日にも現われる三位一体について黙想しましょう。「私たちは人間の活動だけで助けられるのではなく、キリストの受難によって助けられるのです。私の心からの望みは、キリストの受難に参加することです。神の聖なるみ旨に完全に一致して、今からもう、私は神が私のためにお決めになった死を受け入れます。あなたの栄光と賛美のため、神よ、教会の意向に役立つよう私の生命と死を受け入れてください。主が、ご自分の人々の間に迎え入れられ、神の国が栄光に包まれて私たちの間に実現しますように。」（「十字架の力」）　(2000.5.3)

アブラハムの娘、マリア

〔聖地巡礼、ナザレでのごミサ〕

「私は主のはしため、仰せのままになりますように。」（お告げの祈り）

1（･･･）

私たちがここに集まったのは、二千年前に実現された偉大な秘義を祝うためです。福音史家ルカは、この出来事の時間と場所をはっきりと定めています。「六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。ヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。... そのおとめの名はマリアといった。」（1・26～27）けれども、二千年前ナザレで起こったことを理解するためには、ヘブライ人への手紙に戻らなければなりません。この手紙によって、御父と御子の会話、永遠からの神のご計画についての語り合いを聞けるようになります。「あなたはいけにえや捧げ物を望まず、むしろ、わたしのために、体を備えてくださいました。あなたは、焼き尽くす捧げ物や、罪を贖うためのいけにえを好まれませんでした。そこで、わたしは言いました。『御覧ください。わたしは来ました。神よ、御心を行なうために。』」（10・5～7）ヘブライ人への手紙が私たちに伝えることは、御父の御旨に従うことによって、永遠のみことばが訪れ、かつての契約のもとに捧げられた全ての犠牲を越える犠牲が捧げられるということです。キリストの犠牲は、この世を救う永遠で完全なものです。

神のご計画は旧約聖書の中で徐々に明らかにされます。中でも、今朗読された預言者イザヤの言葉で特に明らかになります。「わたしの主が御自ら、あなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」（7・14）インマヌエル。神は私たちと共におられる。この言葉は、時が満ちると、ナザレで起こる素晴らしい出来事を預言しています。そしてこの出来事こ

そ、今ここで私たちが喜びと幸福の中で祝っていることです。

この大聖年の巡礼は霊的な旅路であり、「信仰における父」（ローマ典礼文、ローマ4・１１～１２参照）、アブラハムの足跡をたどることから始まりました。この旅路は今日、私たちをナザレに連れてきました。ここで、アブラハムの真の娘であるマリアに出会います。マリアこそ誰よりも、「アブラハムの信仰を生きる」ということを教えることのできる方です。アブラハムとマリアは多くの点ではっきりとした違いがありますが、根本的なところでは「神の友」（イザヤ41・8参照）と、ナザレのこの若い女性はよく似ています。

アブラハムもマリアも神から素晴らしい約束を受け取っています。アブラハムの息子によって偉大な国が生み出されることになりました。マリアは、油を注がれた救い主となる御子の母です。ガブリエルは言います。「おめでとう、... あなたは身ごもって男の子を産む ... 神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。... その支配は終わることがない。」（ルカ1・31～33）

アブラハムとマリアにとって神の約束は全く予期せぬものでした。神は二人の生活を日々の道筋からはずし、それまでのリズムや平凡な将来をひっくり返します。アブラハムとマリアは神の約束を不可能なもののように思いました。アブラハムの妻サラはすでに年老いており、マリアはまだ結婚していませんでした。マリアは尋ねます。「どうして、そのようなことがありえましょうか。私は男を知りませんのに。」（ルカ1・34）

2 アブラハムのように、マリアはそれまで起こったことのない出来事に同意するよう求められます。聖書に出てくる年老いた妻たちの中で、初めに神の力を受けるのがサラで、最後はエリザベトでした。ガブリエルはマリアを安心させるために、エリザベトのことを話します。「あなたの親類エリザベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。」（ルカ1・36）

アブラハムのように、マリアも暗闇を歩き、自分をお呼びになった方だけをただ信頼しなければなりませんでした。「どうして、そのようなことがありえましょうか」という質問さえ、恐れや不確かさにもかかわらず、マリアには「はい」と言う準備ができていたことを示しています。マリアはその約束が実現可能かどうか尋ねたのではなく、どのようにして実現されるのかということを聞いただけでした。そして、何の驚きもないかのように実現されますが、それはマリアが最後に「なれかし」と言った時でした。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように。」（ルカ1・38）この言葉は、マリアがアブラハムの真の娘であることを示しています。こうして、マリアは救い主の母、信じる人々の母となったのです。

3 この秘義にもっと深く入り込むために、アブラハムが旅路の途中で約束を受けた瞬間に戻って行きましょう。それは、アブラハムが三人の不思議な客を家に迎え（創世紀18・1～15参照）、神に当然与えるべき愛を示した時でした。「三人を見て、一人をあがめた。」その不思議な出会いは受胎告知の前兆です。その時マリアは力強く引き寄せられ、御父と御子、聖霊と一致しました。マリアがナザレで言った「なれかし」を通して達成された受肉は、アブラハムと神との出会いの驚くべき実現となりました。それで、アブラハムの足跡をたどりながら、「地上に光をもたらした」（賛歌アヴェ・レジナ・チェロールム）女性を誉め歌うため、私たちはナザレにやって来たのです。

4 しかし、私たちはマリアと共に嘆願するためにもやって来ました。キリスト生誕第三千年期に向かう巡礼において、神の母に何をお願いしますか。パウロ六世はナザレを訪れた時、この町を「福音の学校」と呼びました。「最も単純で謙遜、そして美しい神の御子の誕生をここで見たり聞いたりすることによって、その深く神秘的な意味を良く考え、理解することを学びます。」（ナザレでの演説1964年1月5日）まず初めに、教会の子供たちが皆、信仰を大きく新たにすることを祈ります。信仰を深く新たにすることです。一般的な生活態度だけでなく、意識的な勇気ある信仰宣言です。「その御独り子、... 聖霊によりて宿り、処女マリアより生まれ」

「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人とに愛された。」（ルカ2・52）ナザレで私は、全キリスト信者を駆り立て、自分たちがそれぞれの家族を守ることができるよう聖家族に願います。キリスト信者は、今日、家庭の本質や安定、使命を脅かしているものから家族を守らなければなりません。聖家族に、キリスト者や全ての善意の人々の努力を委ねます。生命を守り、全人類の尊厳が尊ばれるために働く人々の努力です。

偉大な神の母マリアに、聖地の家族、世界中の家族をお捧げします。

イエスが公生活を始められたナザレで、マリアの助けを願います。マリアの助けによって、あらゆる場所の教会が、キリストのように貧しい人々に「福音」を告げ知らせるためです。（ルカ4・18参照）この「主の恵みの年」に、謙遜に喜んで福音に従い、選り好みや偏見なしに兄弟姉妹に仕えることをマリアがお教えくださるよう願います。

「みことばのみ母よ、この祈りを快く聴き入れてください。いつくしみに満ちた優しい乙女マリアよ。」（聖母マリアのご保護を求める祈り）

(2000.3.25)

尊重されるべき人間の崇高さ

［教皇様は第三十回国連食糧農業機関会議参加者へ向けてお話しになった。］

1　第三十回国連食糧農業機関会議のために皆さんをバチカンにお迎えできることを大変喜んでいます。（･･･）

何百万もの人々が生活に最低限必要な食べ物、水、住まいを得られずにいます。病気は、新しいものも昔からあるものも、数えきれない人々に影響を与えています。暴力や戦争の苦しみは止むことがありません。貧富の差も驚くほど広がっています。科学技術を今日と将来の人々のために正しく活用するには、倫理道徳的価値に注目しなければならないのですが、実際にはそうなっていません。多くの所で、最も苦しんでいる弱い者の生命が、必ず攻撃にさらされています。このような事実に直面すると、多くの人々は道徳的な麻痺状態に陥り、根本的で重大な問題に取り組めるものはほとんど、もしくは全くないと信じてしまうのです。そのような人々は、せいぜい苦しみを和らげることができても原因をつかむことなどできないと主張します。

2　けれども必要なのは、麻痺状態に陥ることではなく、行動を起こすことであり、だからこそ国連の働きがとても重要なのです。今世紀は、人々の苦しみを和らげるどころか、さらに悪化させるような計画や行動が至るところで見られます。イデオロギーに基礎を置く行動では解決策を見い出せないことを今こそはっきりさせる時です。飢えも農地改革も資源のより公平な使用を目指す様々な課題もそれでは解決できないのです。必要なものはより深く無限に創造的な希望の力です。この「希望」こそ今日皆さんにお話したいことです。教会は止むことなく全力でこの言葉を世界の苦しみの根源に伝えます。ここで言う希望は、表面的な楽観主義とは異なります。そのような楽観主義は、心の中にある悪の部分を認めようとしない時に感じられるものにすぎません。より現実的で確かな見方を持つことができるのは、自分の暗い部分をあるがままに認め、同時に心の中に光を発見する人です。

3　教会が伝える希望は、神が人間をご自分にかたどらせ、似たものとして創造されたことに基づいています。（創世紀1・26）これは、根本的な問いかけである人間とその存在についての真理を約束するものです。この点については、二十世紀最後である今、皆さんの組織同様、多くの人々の努力を通して、人間の価値や尊厳、侵すことのできない権利に対する意識が向上するなどのプラス面のしるしが現われていますが、それらは全て希望から生まれ出るものです。時折、言葉が行ないに伴わないことがあるとしても、人権を普遍的なものとする宣言がなされたことはしるしの一つです。言葉と行ないがかけ離れることがあるとしても、この宣言は人々の十分な理解を促し、いかなる権威も大多数の意見も、人々の生まれ持つ権利を奪い得ないことをより一層はっきりさせています。現代の様々な全体主義体制の崩壊が示しているように、基本的人権を認めようとしない国家の試みは、社会を混乱させ、国家自体も自滅に導いています。

4　キリスト者や他の宗教の信者にとって、基本的人権は、理性と自由意志を授けられた人間の尊厳に根付いており、したがって、自らの責任において好きなことができるようにさせます。（「信教の自由に関する宣言」2番参照）ですから、希望について語るとは、人間の超越性を認め、その特質を本当に尊重することとなります。この特質が認められなかったりないがしろにされたりすると、権威独裁主義や周りの意見に耳を貸さない極端な考え方に支配されたり、過去の個人主義に陥ってもう一つの隷属状態に導かれます。侵すことの出来ない人間の価値に目を向けなければ、世界に対する見方はゆがめられ不完全なものになり、苦しみを和らげ不正を正すという努力は失敗に終わるでしょう。

（･･･）

5　この新しい千年期に国連がより効果的な道具となって、世界の発達、一致、平和に貢献できるようにという願いを何度も新たにしています。（･･･）

皆さんの数々の働きによって、私たちの周りにいる最も貧しい人々が助けられていることに深く感謝しながら、皆さんの前に広がる未来を自信をもって眺めています。この会議の仕事を、「飢えた人を良い物で満た」す（ルカ1・53）と聖書に書かれてある御方の導き手に委ねます。皆さんと皆さんの愛する人々、食糧農業機関の素晴らしい仕事に携わる全ての人々の上に全能の神のあふれる恵みがあることを祈り求めます。　（1999.11.18）

「教皇様の聲」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙
■毎月10日発行　■**定価**：送料とも一部186円　■**年内定期購読**：送料とも一部2,087円（税込）
詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。
財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-34-5920
FAX. 0797-34-4920振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会
＊電話受付時間は火･木曜日午前9：30～11：30、水曜日午後2：00～午後5：00となっています。